
ここがゲームの世界だと誰もが知っていた。

琉迅鳴門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ここがゲームの世界だと誰もが知っていた。

【Nコード】

N5511A

【作者名】

琉迅鳴門

【あらすじ】

ゲームの世界で起きた小さな革命。生まれた瞬間に決まった、台詞、動作、感情。彼らは気が付いた。自分が誰なのか。そして、こんな世界を壊してくれる人が居ると。ゲームは解かれる。人の気持ちも知らないで。

第一話（前書き）

久しぶりに懐かしい昔のゲームをしようと思ったことはありませんか？そんな時、大体のゲームは起動しません。理由はいくつかあります。落下、汚れなど。仕方ありませんね。それでも無理矢理、起動させようなんて思わないでください。今、ゲームの世界で小さな革命が起きているのですから。

第一話

ここがゲームの世界だと誰もが知っていた。けれど、誰も気付かないふりをしていた。

自分が不自然な存在だと気が付いたのはつい昨日の事だった。

村人は何回、話しかけても何か次のステップに進まなきゃ、新しいことは言わない。それに村では村の、森では森のメロディがずっと流れて、それが普通だと思わなきゃならなかった。

それに、誰も死んだことはなかったし生まれてくることはなかった。隣の奥さんは毎日死んだ夫の話をするが、誰も、奥さんでさえも死んだ夫を見たことがないし、若い女はいつまでも身籠り新しい命の誕生を待っていた。

四季は無く、常に同じ植物が同じ場所に生える。

この世界は唐突だった。誰も自分がここになぜ住んでいるのか、なぜ森にはモンスターがいるのか、誰が本当なのかを知らなかった。命のリレーなどない。私たちは生まれたのだから。

そんな世界。

そんな世界。

そんな世界に新たな命が生まれた。彼は突然現れ、自由に世界を歩き回った。

勇者。

ではない。

彼は、この世界のバグだ。

第二話

目が覚めると俺は居た。なんだか、ふんわり浮いた感じがする。時々目の前にザーザーと砂嵐が現れ、体をゆっくり起こしてみると頭がクラクラして吐きそうになった。

ここは？

汗ばむ額にそっと手を当てて、自分は何なのか考えてみる。足の先から寒気が上半身にあがってきた。まるで、考えるなど言っているみたいだ。何も分からないなか、恐怖だけが静かにしていた。

起きてみて、しばらく考えたが、分かったことは少なかった。なぜここに居るのかも、今まで何をしていたのかも分からない。

それに、自分が誰なのかまったく分からなかった。

それでも、気が付くと――不思議なことに――名前はちゃんとあった。有るというより居るといった方がいいのかも知れない。ふと、そう思った。

家の中には椅子と暖炉と机、自分が寝ていたベッドしかない。何かが生活しているような感じはまったく無く、ただ存在しているだけのようだ。

彼の名前はレオ。以前は普通の村人Aであったが、今は持ち主の不注意により落下したゲームから生まれたバグである。

頭がはっきりしてきた。先程までの砂嵐も消えている。レオはフーッと息をついて、窓に目を向けた。

「……………」

青い空が切り取られ、窓に収まっている。
なぜ、自分はここにいるのだろうか？レオはぼうっと外を見つめていた。

時間の感覚が無くなりはじめていた。少し恐い。あれからレオは家の中をうろうろと歩き回った。なにか自分のヒントがあればと、いろいろ捜し回ったのだ。しかし、何も出てこない。レオは最後の望みを託して外出を試みた。

日はまったく落ちる気配を見せない。というより、落ちないのだろう。

太陽が照りつけ少し暑い。周りを見渡すとたくさんの人が一定の場所を行ったり来たりしている。彼らには意志がなさそうだ。

機械的に花が左右にゆれている。その上を彼らがドスドスと突き進むのだが、決して花は潰れなかった。

レオは目を瞑り、立ち止まった。この世界は何かおかしいな。それに、俺はこの世界を知っている。

大丈夫だと、なぜか思った。見たことがあるからなのかそれとも自分が誰なのかを解く為のヒントがこの世界にあるという確信があるからなのか、それは自分でも謎だ。

少し、自信がついたレオは何気ないふりをしながら、一人の若い女に歩み寄った。

「何しているんですか？」

そう聞いたことに後悔した。彼女はただ歩き回っているだけだからである。服装からみて、あまり金持ちではなさそうだ。綺麗な金髪を後ろに束ね、何か籠らしきものを持っている。まさか、答えてくれるわけないだろうと思っていた。しかし、彼女は答えてくれたのだ。透き通った声が放たれる。レオは少しドキツとした

「最近、南の方から強い邪気を感じるのです。あ、それは勇者の証！　もしか…あなた様は…！！！！…旅をしておられる様子ですね、

城に行ってみてください。王が貴方を待っています」

話を聞きおわった瞬間、突然世界が暗やみに包まれた。空を見ると四角く黒い物体が太陽を覆っている。その物体には彼女が言った台詞が白い文字で書かれていた。それはずっとそこにあったが、レオが恐くなって後退りをするパツと消えた。空はさっきのように青い。気がつくと彼女はレオの事などお構いなしで、再び花畑の中を行ったり来たりしていた。

なんだよ、勇者の証って……。それに、旅をしておられる様子ですね、だって？何言ってるんだ、あの人。

レオは何も言えずただ立っていた。

第三話

レオは仕方なく家に戻ることにした。少ししか出歩いていないのに、かなり疲れがたまっている。家に入るとき注意深く中を見渡したが家の中には誰も居なかった。もしかしたら、誰か優しい人が俺をこの家で看病していたのでは無いか、と思ったのだ。誰も帰って来ないなら、家はきつと自分の物だろう。

さて、とレオは椅子に座った。これから、どうすればいいのか。記憶を無くしている人間は意外にも冷静だ。レオは机に肘を着いて顎を支えた。色々考えなきゃいけないことが沢山ある。俺が誰なのか、なぜ村人はあんなのか。ふうつとため息をつく。起きてからかなりの時間がたったが空は今だに青であった。

「夜はまだなのか……？」

夜が来ないことに恐怖は無かった。別になんとも思ってたなかったのだ。さて……あの黒い四角い物が何なのか……

あれ？ふと、レオは思った。

なぜ、俺はこの空がいつか暗くなることを知っているのだろうか？俺がたとえこの国の人間じゃないとしても、空はどこに住んでいたって、共通だ。俺は生まれてからこの夜のやってこない空しか見ていないはず。どこか違う星から来たのなら別だが……。まず、そんなことはないだろう。いや、何か書物を読んだのかも知れない。しかし————見ることは不可能だろ……？

何かが変だ！

バツと立ち上がってレオは気を失った。

そして、この世界を知る。

気が付くと体中が汗で濡れていた。レオは椅子から転げ落ちたよう
でひんやりした床に倒れている。

「……………そんなことってあるのかよ……………」

頬から涙が零れ落ちた。

第四話

夢を見た。レオがレオを見ている夢だった。

レオが家の中で歩いている。ずっとノロノロ、ベッドと椅子の間を行ったり来たり。目にはまったく生気が無い。誰かに操られているような……そんな感じだった。

人の気配を感じた瞬間、バンツと激しくドアが開いた。急に入り口から誰かが入ってきたのだ。謎の人物はギロリと部屋の中を見渡す。レオは彼を無視するように歩き続けた。謎の人物もレオの事を気にしていないようだ。

ふと、気がつくとレオは一人になっていた。

自らノロノロと歩いている。時々躓きながらも床の上を歩く。疲れているのに、足が止まらないのだ。腰に剣をさした謎の人物はしばらく自由にレオの家を歩きまわっていたが、ふとレオの方を見た。なにかに追われているような顔で、睨み付けてくる。レオは何か言いたかったが、声は出ずただ口が動くだけだった。

動きやすそうなズボンとTシャツ、頭には帽子。彼は大きな黒い瞳をギョロつかせながら、レオの前に立った。

何か、ビリッとしたものが体中を駆け巡り、気が付いたら口から声が放たれていた。

「勇者のほくらで謎を解くための歌があります。

一つ手に取れ、右に左に回してごらん。先代様も見たらっしやる。

上上下下上下上。これが解ければ誰だって知識と勇気と強さの象徴、聖剣が授けられるでしょう」

天井に四角く黒い物体が表れた。昼間、あの村人に話しかけた時と同じ。レオの言った言葉が白い字で書かれていく。

きっと彼は聖剣が欲しいのだろう。よく見ると、体中に擦り傷がある。

彼はもう一度レオの目を見た。

再び背中に痛みが走る。さっきよりも強めな痛みだった。

「勇者のほこらで謎を解くための歌があります。

一つ手に取れ、右に左に回してごらん。先代様も見たらっしゃる。

上上下下上下上。これが解ければ誰だって知識と勇気と強さの象徴、聖剣が授けられるでしょう」

そのまま時間がたくさん過ぎた。台詞を言う前に走るあの痛みが強くなる。レオは汗をかきはじめていた。しかし、彼は止めない。しつこく何回も彼はレオの目を睨んでは、レオが言う台詞を聞き取った。

早く出て行って欲しいと、少し思う。ビリッ

何が知りたいのだろう？ビリッ

足が震える。ビリッ

……もう止めてくれ……

と思った瞬間！

第五話

生暖かい。

たくさんの回路とデータがそこらじゅうに張り巡らされている。

レオは裸だった。

寒いなと思い、辺りを見渡すと、服があった。しかし、押し花のように薄い。長い長い廊下のように続く、光の道。レオは紺色のシャツと短パンのに近づく、そつと手に触れてみた。

パンツと小さく破裂音。

見るとレオは服を来ていて、寒くはなかった。

レオはこの場所を知っていた。なぜなら、自分が生まれた場所だったからだ。ここで皆生まれたのだ。勇者も、モンスターも。

光の道を進んでいくと大きなモニターがあった。何かが戦っている様子である。レオはそのモニターをじっと見つめる。戦っているのはモンスターと勇者だ。

モンスターが勇者の左手をもぎ取った。勇者の顔が歪んでいる。モンスターは勝ち誇ったように、勇者を睨みつけていた。

「なんてリアルなんだ……」

レオがもうダメだと思った瞬間、勇者はモンスターの首を切り落とした。すると、その切り落とした頭も持ちながら踊りだしたのだ。タクマはレベルアップした。とメッセーじが流れ、軽快なメロディが鳴り響く。レオはこの異様な景色を見るのが苦痛になり、すぐさま目を逸らした。

目を逸らした先にまた、モニターがあった。勇者が村人に話しかけているようだ。

「最近、南の方から強い邪気を感じるのです。あ、それは勇者の証

！もしや…あなた様は…！！！！…旅をしておられる様子ですね、城に行ってみてください。王が貴方を待っています」
村人はレオが昼間（と言ってもいつまでも昼間だが）に話しかけた、あの女だった。

なるほど。とレオは思った。何故、彼女が俺を勇者だと思ったのか。それは普段話すことなど出来るわけが無い村人同士が会話をしてもったから、彼女が誤作動を起こして俺を勇者だとしたのだ。

レオは気が付いた。ここがゲームの世界だと。

いや、今まで知らなかったわけじゃない。ただ、気が付かないフリをさせられてただけだ。

レオはそのまま目を瞑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5511a/>

ここがゲームの世界だと誰もが知っていた。

2010年10月10日05時59分発行